

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

①

「五葉山や五葉山麓、愛染山の自然の豊かさをいつまでも後世へ残せるよう、その素晴らしさと大切さを伝える」――五葉山自然倶楽部の設立理念です。一九九八年二月二十二日に結成し、今年で創立十周年を迎えました。会員の自主性、自発性を尊重し「親しみながら、楽しみながら」をモットーに、「自然散策」「森林浴」「写真展」「フォーラム」「講演会」「学習会」など多様な活動を展開してきました。私たちは五葉山に寄せる思いを語り、伝えることによって、全国的にも注目される五葉山を多面的、多角的に捉えてみたいと考え、「五葉山の魅力」を語るリレーエッセイを企画しました。このエッセイは、五葉山を介して自分自身と真正面に向き合った一人ひとりの人生の物語です。(五葉山自然倶楽部事務局長・千葉修悦)

昭和三十六年、私は高校を卒業し、青森営林局から届いた「四月一日、大船渡営林署に出頭されたい」という採用通知を持って、国鉄大船渡線の盛駅に降りた。

盛駅に着く少し前、陸上に漁船が横倒しになっているのが目に入った。前年五月のチリ地震津波によって、海からこんな遠い所まで打ち上げられたというのを後で知った。

主に登るコースは、県南バスの終点である下甲

子(しもかつし)で下車後、大沢を経由し、豊石

大沢小屋の改築の思い出

盛岡市西青山

田村 正美

しゃくなげ荘、頂上の順。そのあと、黒岩まで足を延ばし逆戻りするという単純なものだった。

ときには頂上から黒岩、そして800高地を経て下甲子に下ることもあった。また、頂上から

日の出岩を経て鳩ヶ峰方面へ向かう稜線を下り、林道出合(指導標があった)から豊石に出る等高線沿いの林道(狭かった)

を歩くこともあった。幸運にもこのコースでニホンザルの群れを見たことがある。

秋の山行は、前回よりいかに早く頂上アタックするかという、どちらかといえば「がむしゃら」に歩くタイプだったのだ。植物を注意深く観察することは少なかったように思う。いま考えると、ゴウザンヨウラクなど

に上り、頂上に至るコースを歩いた。一度だけ、頂上から愛染山を経て枯松峠に下ったことがあるが、ブッシュを漕ぎながら苦勞して下山したことを思い出す。

大沢コースを利用すると、必ず「大沢小屋」のお世話になった。昭和三十九年までの大沢小屋は、丸太の骨組みに茅で屋根や周囲を覆った原始的なみすばらしいものだった。それでも、登るときは最後の身支度の場所

希少植物を見る機会があったのに見ないでしまいい、勿体ないことをしたと後悔している。

一年後、住田町上有住にある国有林の造林事業担当員に配置換え(四月、十一月の期間)となり、民家に三年間下宿させて

いた。ここでも五葉山通いを続け、桧山から旧道コースを選び、営林署の造林小屋から黒岩

として、下山の時は緊張を和らげる憩いの場所として、なくてはならない小屋だった。

昭和四十年だったと思うが、大船渡市役所に大船渡山岳会が動きかけて大沢小屋を改築することになった。大船渡市役所が基礎コンクリートロー

ソク、ブロック、鉄骨アングル、トタン板、筋交いなどの資材を調達して

大沢口までトラックで運び、そこから現場までは人力で担ぎ上げた。これらの作業は大船渡

市役所職員、大船渡山岳会会長、大船渡市に所在する高校の山岳部員ら十数人により、何度も往復して行った記憶がある。私も山岳会員の一人としてこれらの作業に加

わった。多人数での作業だったので二間×三間のトタンの鉄骨平屋建ての小屋は、一日で組み立てられ

た。薪ストーブも据え付けられ、快適な休憩場として登山者に提供されたのである。改築して四十年経つが、今も使われているだろうか。

【執筆者プロフィール】盛岡市在住。六十六歳。最初の赴任地が青森営林局大船渡営林署。七年間勤務し、このうち三年間を住田町上有住の民家に下宿。就職が五葉山登山の契機となる。大沢小屋の改築に携わったことが忘れ得ぬ思い出となっている。



大沢小屋を改築した仲間とともに完成の記念写真(昭和40年ごろ)＝後列左から2人目が筆者

リレー
エッセイ